令和元年度　栃木市広島平和記念式典中学生派遣報告会（R1.8.29）

「被爆体験講話学習」　A 班

・講師の方の紹介、講話の内容　荒川清正（栃木東）

はじめに、被爆体験講話をしてくださった講師の方を紹介します。今回講話をしてくださったのは、白石多美子さん、８０歳です。白石さんは小学１年生のとき、学校に着いて本を読み始めたときに爆心地から４ｋｍ離れたところで被爆しました。

原爆が投下された後は、履いていた下駄が無くなってしまったので、裸足で学校から家まで走って帰ったそうです。道に割れたガラスが散らばっていたので足の裏が血だらけになり、他にも頭に 2 か所と腕に 3 か所怪我をしていましたが、お母さんに手当てをされるまでは恐怖で痛みを感じなかったそうです。

白石さんは、8 月 7 日から 9 日までおばあさんを探しました。たくさんの死体で道がふさがれているところもありました。表現できない嫌なにおいがして、白石さんはそのにおいを広島のすべてを奪われたにおい、とおっしゃっていました。

白石さんは、原爆症がうつると言われて学校に行くことができませんでした。しかし、中学校は私立の学校に行き、２２歳で結婚して今は幸せだと話していました。

私は、辛い思いをしたことを白石さんが話してくださったことに感謝したいと思います。

・講話を聞いた感想①　山田虹心（藤岡第一）

私は白石さんから、あの 8 月 6 日の広島についてのお話を聞いて、戦争の恐ろしさを感じることができました。このお話を聞いて自分で想像するだけでもつらいのに、実際に被爆した白石さんや被爆者の方たちはどれだけつらかったのだろうかと、本当に心が痛くなりました。私が白石さんのお話を聞いて一番心に残った場面は、白石さんのおばあちゃんを探しに行く道中で見た光景についてです。人の死体を見て怖くて動けなかった、と言っていましたが、聞いただけでも怖いです。それを 7 歳で体験するなんて。この日のことは一人でも多くの人に伝えていかなくてはならないことだと思います。広島に落とされた原爆がもう二度と世界のどこにも落とされないことを祈ります。

・講話を聞いた感想②　稲村優芽（都賀）

私は講話を聴いて、原爆は一瞬にして私たちの様々な大切なものを奪っていくのだな、と思いました。私なら、大切な家族、友達、物を一瞬にして失ったら、原爆を落とした国も、落とされるようなことをした自分の国も許せずに、心に深い傷を負って生きていくと思います。ですが今、被爆者の方々は、私たちに講話などをボランティアで行ってくださり、戦争のない平和な世界を祈ってくださっています。本当にありがたいことだと思います。

私たちの国は、世界で唯一の被爆国です。だからこそ、戦争の悲惨さ、平和の大切さを私

たちの周りに伝えていかなければいけません。そしていつか、核兵器も戦争もない世界になるように、私たち一人一人が行動していかなければいけないと思いました。

・講話を聞いた感想③　奈良部心優（皆川）

「早く帰りなさい。」お医者さんが被爆者の白石さんとその母に言った言葉です。白石さんは爆風の影響でガラスが体中に刺さってしまいました。そのため病院に行ったのです。しかし、お医者さんは相手にしません。白石さんの母親は断念しました。そのとき私は怒りの感情が出てきました。重傷の人も治さないの、と思ったからです。しかし、その後です。白石さん達が帰ろうとすると、トラックの中から頭を切ってそこをタオルでおさえている人が出てきました。そして噴き出した血が肘からたれていました。そこの部分を聴き、私はゾッとしました。その他の場面も生々しく、自分がそこにいるみたいで本当に恐ろしかったです。

もう二度とこのような残酷なことがないように、そして起こってしまった出来事を絶対忘れないように、たくさんの人々に伝え、知ってもらおうと思いました。また、改めて私たちの贅沢すぎる暮らし、人の命の重さ、友だちの大切さを考え直すことができました。そして私たちは本当に幸せなのだと実感しました。

・講話を通して学んだこと①　牛久恵太（大平南）

僕たちは講話を通して、たくさんのことを学びました。おだやかで楽しいまちを、危険で恐ろしい場所へと変えた、原爆の怖さや悲惨さ。そして何より、人体の奥深くまで影響を及ぼし、被爆した日から現在も苦しんでいる人がいることが衝撃でした。また、白石さんは６０歳になり講話を始めましたが、そのときまで、原爆のショックでそのことについて話せなかったように、心にも大きな影響をあたえ、人々の自由を奪うのが原爆だと分かりました。そして心に負った傷は一生消えることのないものだと思いました。原爆により約１４万人が亡くなり、そのうち中学生は６千人が亡くなりました。まだ僕たちには未来があります。だから僕たちは亡くなった人々の分まで、平和に感謝しなければいけないと思いました。

・講話を通して学んだこと②　山田昂希（岩舟）

僕が話を聴いていて一番感じたことは、長さ約３ｍ、直径約０.７ｍ、重さ約４ｔの小さな原爆一発で、広島市民、僕たちのような学生、そして広島市を破壊する力を持つ核兵器が世の中に存在してはいけないということです。「炎や死体で、通るところがなくなる。」や「変なにおいがした。これは広島が焼かれたにおいだ。」この言葉から、原爆がもたらす被害とその悲惨さがとても伝わってきました。

実際に体験した方の気持ちを考えると、とてもつらく、思い出したくないと思います。でも、「広島の原爆」についてはたくさんの人に語り継いでいかなければいけないと思いました。